

故玉田美治教授抄

伊藤喜雄

信州大学経済学部教授玉田美治氏は、昭和55年6月20日食道がんのため永眠した。享年47才。学業も人生もこれからというときに病魔は氏の生命を奪い去った。小稿は故人の死をいたみながら、その略歴、学問、人となりなどについて略記するものである。

玉田美治 昭和7年8月23日、岐阜県可児町に生れる。東濃高校を経て昭和31年3月、東京大学経済学部を卒業し、すすんで同大学大学院社会科学研究所理論経済学コースに進学した。修士課程、博士課程を一貫してマルクス経済学原理論の研究に従事し、宇野弘蔵、大内力教授らに将来を囑望される身となった。

昭和37年7月1日、玉田氏は経済企画庁（総理府事務官）に入庁し、同年9月18日、国家公務員採用上級試験（甲種、経済職）に合格した。ついで昭和41年4月1日、乞われて信州大学に助教授として赴任した。文理学部改組によって同大学に人文学部経済学科が設置されたためである。その後昭和52年8月16日教授に昇任し、さらに同53年6月17日、あらたに経済学部が創設されたことによってその教授となった。

経済学部創設後半年もたたない同年12月、氏は肺結核のため信州大学医学部附属病院に入院した。そしてそれが快方にむかいはじめた54年春喉頭腫瘍が発見された。2回に亘る手術を耐えぬきながら、またまたその秋食道がんが発見される。東京女子医科大学早期がんセンターに転院してやはり2度に亘る手術を受け55年春、療養のためふたたび信州大学医学部附属病院に入院していた。超人的ともいえる忍耐力と闘病精神で、これらの難手術を耐えぬいてきた同氏は、ここで病魔に打ち克つかと思われたのであったが、しかしその願いはむくわれなかった。

経済企画庁において玉田氏は、E E C諸国の経済政策、経済統計調査などの研究調査に従事した。そのため昭和40年1月から2月にかけて渡欧し、イギリス、フランス、ベルギー、西ドイツ、およびイタリアの各国を歴訪した。その成果は経済企画庁の作成する「世界経済白書」などの執筆、あるいは「ドゴール政権の安定的成長政策」（“経済評論”昭和40年1月号）「E E Cと農業問題」（“思想”昭和40年11月号）などとして世に問われた。一方当時大内力教授らが編纂をはじめた「国民の経済白書」の作成にも参加し、主として国際経済についての諸章を担当執筆した。

これより先、玉田氏は大学院における原理論研究の成果として「貨幣と資本——マルクス信用論の二規定——」を公表していた。鈴木鴻一郎編『信用論研究』（法政大学出版会、昭和36年11月）に掲載されたこの論文は多大な反響を呼び、東京大学大学院における俊秀の誕生と評された。

もとより玉田氏の学問的出発点は、昭和30年代初頭の状況を反映して、日本経済の現状分析をいかにして深化発展させるかということにあった。そのため学部在学中は大内力教授に師事して勉強していたのであるが現状分析の武器をみかくことを同教授にすすめられ、理論コースの大学院にすすんだという。この現状分析への関心は、たとえば大学院時代に参加した『経済団体連合会十年史』（中央公論事業出版、昭和37年～8年）の作成にもあらわれている。玉田氏はこの共同作業で「第7章 エネルギー政策の変遷と当会」（下巻所収）を執筆しているが、それは石炭から石油への転換期の実情を綿密に書き出し、さらに電力から原子力にまで説きお

よんだ大作であった。

ところで経済企画庁における上記の諸作品は、玉田氏を原理論の俊秀から現状分析 とりわけヨーロッパ経済の専門家に変貌させた。経済企画庁における弱冠気鋭のエコノミストとしてあらわれたのであるが、これらの作品群は国際化を強めていた日本経済の進路を探る準備作業と考えていたようである。とはいえ上記の研究をつうじて、玉田氏の問題関心はしだいにフランス経済にしぼられてくる。それは「ドゴールの経済政策とその破綻」（“経済構造”昭和43年9月号）という作品などにうかがうことができる。

この頃から氏の研究拠点は信州大学にうつるが当時すでに上記の諸論文によって氏は、数少ないフランス経済についての専門家として声価が定まっていた。そしてフランス経済についての本格的な研究に着手していたとき折しも、昭和46年8月、ニクソン声明が公表されて第二次世界大戦後の世界経済の決定的な変容再編がきらかとなった。これをうけて同年秋、大内力教授はシムポジウム『現代資本主義の運命』（東京大学出版会、昭和47年7月刊）を主宰されたが玉田氏はこれに「アメリカ国家独占資本主義」という研究報告をもって参加した。

今もなお版を重ねてひろく読みつづけられている同書において、玉田氏が世界経済の中核であるアメリカ経済を担当したこと、ならびにその多面的かつシャープな考察はおおいに注目された。氏のもっているきわめて該博な知識とするどい問題関心が高い評価の理由であった。これによって氏は、フランスを中心としたヨーロッパ経済の専門家であるのみならず世界経済論の理論的、実証的研究者をして知られることになった。余人の追従をゆるさない広汎かつ膨大な学問的実証的知識の集積を綿密な体系として展開する氏の学風が世の承認をうけたのである。その後、氏はふたたびフランス経済の研究に没頭し、その一部は「国家独占資本主義へのフランスの道」（日高普他編『マルクス経済学理論と実証 大内力教授還暦記念論文集』東京

大学出版会、昭和53年6月）として公表された。また、氏のこれまでのフランス研究の集大成として『フランス資本主義』（青木書店『講座 帝国主義の研究』第五巻として刊行予定）が完成の日を迎えようとしていた。同書は第Ⅰ次世界大戦前から第Ⅱ次世界大戦前に至るフランス経済について、産業構造、財政・金融、さらには経済政策の展開などについて綿密広汎な解析をおこなったもので、類書の少ないこの分野では画期的な労作となるはずのものである。序章から第2章まではすでに校正刷が作成されており、終章となる第3章が未完の原稿のままでのこされていた。主著となるべきこの大作ははからずも遺作となってしまったことは故人のもっとも無念としていることであろう。目下この原稿は戸原四郎教授によってとりまとめがいがされている。昭和56年夏までには刊行のはこびとなるので広く購読されたい。

以上略述したとおり、玉田氏はその短かい研究生活の中でかならずしも多い数ではないが、理論から応用に至る、また歴史から現状に至る、さらには日本からフランス、アメリカに至る広い分野において水準の高い研究業績をのこした。そして、これまでのいわば学問的蓄積の段階から、その開花・結実の段階にうつろうとする矢先に世を去ることとなった。氏を知る者にとってはもちろんのこと、わが国の社会科学はあきらかにもっともすぐれた頭脳の一つを失なった。

ところで玉田氏は、信州大学においては経済原論を主とし、年によっては世界経済論の講義も担当していた。氏の講義に対する熱意と責任感は筆者ら同僚の遠く及ばないものがあつた。たとえば試験の採点に際して氏は、すくなくとも3回は答案を読み返すのが常であつた。はじめに荒読みをしておよその傾向をつかみ、ついで精読して点数をつけ、さいごに採点に誤りがないか、どうかを確かめるのである。おそらくこれは他に例を見ない丹念さと評してよいであろう。

この熱心さは、毎年おこなっていた演習で一層強められる。氏はこれまで信州大学において

100人余りの演習生を教育して世に送り出した。その人びとの生きかたはさまざまであるがしかし、卒業後もっともよく母校を訪れるのは玉田ゼミの卒業生といってよい。また学生がもっともよく訪れた場所は氏の私宅であった。強い学問的信念に支えられた氏の風貌や語り口が、ある種の教祖的特質をもっていたものと見えて氏の演習生以外でも玉田信者はきわめて多かった。その意味で学生たちは、もっともすぐれた教師を永遠に失ってしまった。

他方信州大学において玉田氏は、学内行政全般にわたって強い指導力を発揮していた。着任早々から補導協議会委員をつとめたほか、大学改革専門委員、入試委員、図書館運営委員など毎年欠かさず要職にあったといってよい。

とりわけ氏が精魂を傾けたのは信州大学経済学部の創設であった。この課題は信州大学着任以来の悲願であってある時期には学生紛争のテーマとなったほどのものであった。そしてこれがはじめて現実的な課題として内外に承認されたのは昭和49年度のことであった。「大学の自主的改革に関する調査経費」という予算が信州大学人文学部に交付されたのである。これより先文部省は大学紛争以来検討を重ねてきていたわが国の大学教育の改革方向をようやく具体化してきていた。その一つが、この調査経費であって信州大学人文学部は、その初年度の予算を京都大学教養部および島根大学文理学部とともに獲得したのであった。これについてはそれまでの準備過程も重要であるとはいえ、直接的には当時の永井人文学部長の努力を多ししなければならぬ。同氏は当時の文部大臣や大学学術局長に対して強力な働きかけをおこなって調査費予算を実現した。人文学部人文学科内には、まだ一部の反対があったにもかかわらず、同氏がそれだけの努力を払ったのは、実に故玉田氏の要請を大きな理由としていた。節を曲げずしかも信義を重んずる玉田氏の人間性が、永井氏を動かしたと筆者は考えている。こうして玉田氏は、経済学部創設にむけての最初の実弾を打った。

いうまでもなく一つの学部を創設するということは、学内外の一致協力のもとより、多くの紆余曲折の中での的確な運動方向がもためられる。その詳細をのべることは小稿の課題からされるので省略するが、この紆余曲折の中で玉田氏は、いつも参謀長としての役割を果たしていたことは記しておきたい。

またどうしても述べなければならないのは学部創設最終段階における氏の働きである。創設準備から創設への局面において、玉田氏は単身であるいは同僚とともに大蔵省に出向き、直接に担当官と強力に折衝をつづけた。さらに幾度か書簡や電話を利用しての働きかけもおこなっていた。このとき玉田氏は参謀長から行動隊長に変身して、自から陣頭に立ったのであった。玉田氏は経済学部創設の決定的局面を自から切り拓いた。この過程で、大学の理念、そのありかた、とりわけ社会科学系国立大学の現状や問題点、さらにはその改革方向などについて玉田氏が、担当官の厚い信頼をうけるようになったことは記すまでもない。

氏が生命をかけて創設した経済学部に氏の姿を見ることはできなくなった。心外これに過ぐることはない。

ところで故人は、生前から大変に悲劇的な人だったかもしれない。余りにも多くを読み取ることができることと、自己の信念に忠実であって誰よりも妥協を忌み嫌うことが、その一つの理由と思われる。氏の学問的労作が、その高い水準にもかかわらず数がとくに多くないことはさきにふれたが、このことは、けっして安易な仕事をすまいとする氏の学問態度とかかわっていた。前述『フランス資本主義』に必死に取り組み、無数の原稿用紙を破り捨てながら苦吟していた氏の姿が筆者の脳裡には、さまざまと甦るのであるが、その時筆者らは「眼をつむらなければ原稿など書けないぞ」などと非科学的なことをいっていたものである。

また妥協を嫌う氏の性格は、そのするどい舌鋒とともに、ときには誤解されてうけとられることも少なくなかった。これほど信頼できる味

方はいないということは、これほど恐しい敵はないということと同義であった。

他面氏は、自からをよく「小心者」と称していた。余りにも多くに気付き、それらについて配慮する自からの性格に気付いていたのであろうか。あるいは妥協を排しながらも孤立や狷介を避けようとする内心を見つめての自己表現だったかもしれない。見た眼よりは淋しがりやの心のやさしい男であった。

玉田氏の責任感の強さは、これまでも述べてきたが、それは氏の「家長」としての責任のとりかたとしてもあらわれていた。東濃地方の旧家の長男として育った氏は、生れながらにして家長たることが運命づけられていた。益暮には欠かさず家族をあげて帰郷し、母堂に孝養をつくすとともに祖先の供養をするのを慣わしとしていた。自からは入院の身でありながら夫人と子供たちだけを帰省させた正月もあった。これも一つの悲劇だったかもしれない。似たような境遇に育った人は、玉田氏や筆者らの年代には数多くいるのであるが、氏ほど家長の責任を果しつづけた人を知らない。対比して筆者などは10年余りも前から長男としての責任を放棄している。大袈裟に言えば近代日本家族制の矛盾を

背負つづけての学究生活だったのである。

「辛い」ということの嫌いな男の悲劇であった。完全主義にこだわりすぎたのである。

経済学部創設の昭和53年度は、氏のフランス留学が実現する年でもあった。その年の終りか54年の早春、氏はフランスへ飛ぶ手はずをととのえていた。その永年の夢は入院によって延期され、死によって打ち砕かれた。不運とも悲劇とも、表現してみよりのない噴りをおぼえる。

氏の遺稿の中に「娘たちへのエチュード」と題された2冊に亘る自伝風のノートがあった。これも未完のものと思われ、幼時から小学校頃までの故郷の風物や家族、友人の状況などがつづられていた。このことはここに書くべきことでないかもしれないが、幼ない2人の娘さんをのこして世を去らねばならなかった氏の胸中を憶うとき故人にしかられるのを覚悟して読者に告げておきたい。

人一倍子ぼんのうだった故人の心をくんで、大内力先生を代表にお願いして遺児育英資金募金事業を続行中の今、それを成功させるくらいのが、せめてもの供養と考えている。合掌。

(昭和56年1月10日)